

令和6年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部
(県知事賞 最優秀賞)

「 8・6水害が伝えたもの 」

鹿児島県 鹿児島市立鴨池中学校 3年 寺師 帆華

最近ニュースで「土砂災害に警戒してください。」という言葉をよく耳にする。実際に昨年の土砂災害発生件数は過去平均を上回る1471件発生しており、そのうちの約70件が鹿児島県である。なぜ日本はこの時期に土砂災害が多いのか。それは、土砂災害が発生しやすい条件に日本の地形や気候が当てはまっているからだ。日本には高く険しい山やもろい地質の山が多い。さらに日本は地震大国であり、梅雨や台風の影響で激しい雨が降る。これらによって土砂災害が発生し、山が崩れることで被害が大きくなってしまふのだ。私たちが住む鹿児島県も過去に大災害が発生した。

1993年8月6日、鹿児島市を中心に集中豪雨が襲った。その名も「8・6水害」。私はこの災害を経験した祖父に話を聞いた。この日、祖父は桜ヶ丘で仕事をしていたそうだ。祖父は毎朝、天気予報を確認している。この日の天気は大雨。いつもと違う雨を感じていたが、今までに激しい災害を経験していなかったので軽く見ており、そのまま仕事現場へ向かった。小学校の校舎の中で作業をしているため、外の様子はあまり分からない。するとお昼のラジオで大雨による被害が大きいことを知り、午後5頃に早めに仕事を終わらせた。だがもう遅かった。外の景色がいつもと違う。何ヶ所もの排水溝の蓋が外れて噴水のようになっており、甲突川は道路まで水があふれて橋を渡れない。車ではこれ以上進めなかったの道を引き返し、職場に車を置いて流されないようにロープを巻き付けた。歩いて帰ることも難しくなったため、職場の近くに住んでいる同僚の家に避難した。しばらくして雨が少し弱まり午後10時頃、橋が渡れないか様子を見に行ったら。ダメだと分かっているけど、心配で見に行きたくなってしまうらしい。そこには川か雨か分からない濁った水が膝から腰くらいの高さで流れていたのだ。地面がどこか分からず、油断してしまうと足をとられるので歩くことに必死だったという。祖父は同僚の家に戻り、家族が無事か確かめるための連絡をとったが、つながったのはそれから何時間か後だったそうだ。そして雨が止んで川の水が引き、午前1時頃に職場に戻ることができた。そこに置いていた車の中はハンドルのところまで水がつかっていたらしく、開けると泥がたまっていてエンジンは壊れ、車は動かなくなっていたそうだ。結局、祖父が家に帰り着いたのは朝。家に帰れず、川が氾濫してしまうほどの大雨だったことが話を聞いて分かった。また、私が中学2年生のとき、職場体験で訪れたラジオ局で当時の音声を聞いた。それは、60代くらいの男性が消防に通報してきたものだった。雨の中慌てているからか、その男性は早口であまり聞き取ることができなかった。他の人たちも電話の向こうで叫んでおり、落ち着きがない様子だ。それもそのはず、大雨の影響で男性たちのすぐ近くを土砂が流れているのだ。するとそのとき、男性が大きな声で、

「おい、何してるんだ。早く逃げろ！」

「プツッ。プー。プー。」

緊迫した状況の中、電話が切れた。この瞬間を私は一生忘れない。文章で表すことができないほど、生の音声の力は大きく、私は全身鳥肌が立った。約30年前の音声だが、すぐそこで災害が起こっていると思ってしまった。電話の向こうで何が起きたのかは分からない。あの男性はどうなってしまったのか。通報を受けた通信指令室はどのような気持ちだったのか。想像するだけで恐ろしい。

このように「8・6水害」というものはたくさんの犠牲を生んでしまったが、この経験を生かせば未来の命を守ることだってできる。現在の鹿児島県では大雨が降っても、川が氾濫するということをあまり聞かない。なぜならこの経験を生かし、川底を深くする工事が行われたからだ。人は学んで成長する。このことを改めて感じさせる出来事だった。また「防災士」という資格もある。「防災士」とは、社会の様々な場で「防災力」を高める活動が期待され、そのための十分な意識と一定の知識、技能を修得したことが認証されたという民間資格だ。私の父はこの資格を取

令和6年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部
(県知事賞 最優秀賞)

得している。こんな風に一人一人が防災への正しい知識を身につけ、一人でも多くの命が助かることを願っている。